

無責任エッセー

旅のハジの書き捨て

福崎かずたろう

4月なんだよ。そんで場所は広島県の三次なんだよ。隔月で書いてると自分でも分かんなくなるなあ。

三次から芸美線に乗った。広島行きである。この線に乗るのは始めてである。予想していた風景としては、超ローカル線で、狭く暗い谷間の路線を、小さなディーゼルカーがあえぎあえぎ登っていく、というものであった。というのも、この路線は、ヒバゴンなんかがちょくちょく現れて列車を襲ったりする、とか聞いていたからだ（ウソ）。

冗談はともかくローカル線というのは当たっていたが、「超」が付くほどではなく、また景色は、開けた なだらかな山間で、そこを列車はゆっくりと下って行く、というものであった。だいたい中国山地というのは地質的に古いところだから、険しい山というのが無いのだな。

ということで、風景は実に穏やかで単調、天気は花がすみ、腹は満たされ、車内は静閑としていて、暖かい。こんな状況で私が30分以上居眠りをしてしまったとしても、誰が私を責める事が出来ようか（いや出来はしないのだ）。というふうに、漢語的表現をしてしまった。まあ中国山地ということでご勘弁。

いつからか私の後ろのボックスに居る女の子2人は、ずう～と自分たちの色恋話をしている。「ぜええ～ったい！秘密やでえ～」と、かなり長いあいだ念を押している。そういう秘密を公の列車の中ですんなよなあ、と思いつつ、私は聞き耳をたてる。

卒業式まぎわになんとか君から告白されて、けっきょくフットんだかフラないんだか、という たわいも無い話であったが、最後にまた

「ぜええ～ったい！言うたらいけんよ。私はかまわんけんど、向こうが気にするけん。」とか言っていた。それやったら自分の胸におさめとけっちゅーんじゃ、ば一たれ！ けっきょく自慢話だったのね。

くだらない話に愛想をつかし、再びまどろんだかと思ったら、終着、広島が近づいてきた。

広島という街は始めてである。実は避けていたという感じもする。直接的な原因は、このあたりを走る夜汽車がないために、ボンビーな学生時代は立ち寄れなかったのだと言える（宿泊費がないから夜汽車に乗って旅行していた）。が、間接的な原因として小学生時代に読んだ怪奇モノの本の影響がなかったとは言えな

いだろう。

広島はご存知の通り、昭和時代にゲンバクの落とされた街である。広島駅の待合室や便所には、今でもゲンバクで死んだ女の人の亡霊が、出るという、そして「私、きれい？」と訊ねてくる……という話だった。小学生であった私は『はだしのゲン』で見た「焼けただれ熔けた皮膚が、ゴムのように顔や手の先から延び……」という被爆者の亡霊が、現実に関自分の前に現れるかもしれない、と思うと、モノ凄く恐かったのだった。

というわけで、広島には恐いイメージがあり、近寄り難かった。

しかし実際の広島は、思った以上に、都会であって明るかった。駅前からはバスや市電がひっきりなしに発着している。外人の観光客も多く、「ゲンバク」「ゲンバク」と言っている。

余り時間はないが、原爆ドームだけは見て行こうと思っていたので、市電に乗った。桜は散り始めている。

ドームはポツンと建っていた。そして少し離れたところに こぎれいな 資料館などが林立していた。ドームは単なるシンボルなのであるなあ。よく考えたら上空で原爆が爆発したというだけで、被害はその周囲何十kmにも及んだわけだから、ドームだけ特別視するのはおかしいわけだな。

原爆平和記念館（入館50円）は、予想どおり、おどろおどろしい絵や人形モデルでもって、原爆の戦争の悲惨さを訴えていた。こういう直接的な訴えは、子供相手には「おそれ」というカタチで残るので、効果的であると考えられる。ただ中学生くらいまでであろうが。

記念館を出たところで、何やら戦争反対のうさんくさい募金集団につかまってしまった。面倒なので100円募金した。まあ、せいぜい有意義に使ってちょうだいね。